

令和6年度企画展
「苦難を乗り越えて－明治23年の水害－」
展示パネル

(レイクタウン防災フェス関連事業)

苦難を乗り越えて

— 明治23年の水害 —

昨年6月初めに、越谷市でも浸水する出来事がありました。

関東は古来、治水が大きな課題でした。今でこそ市域の堤防が決壊することはありませんでしたが、昭和30年代までは一生の間に何度も床上浸水を経験することは珍しくなかったのです。今回の展示はそのことについて共に思いを致し、先人から学ぶ機会にしたいと考え、企画しました。

1 水防建碑宴会図

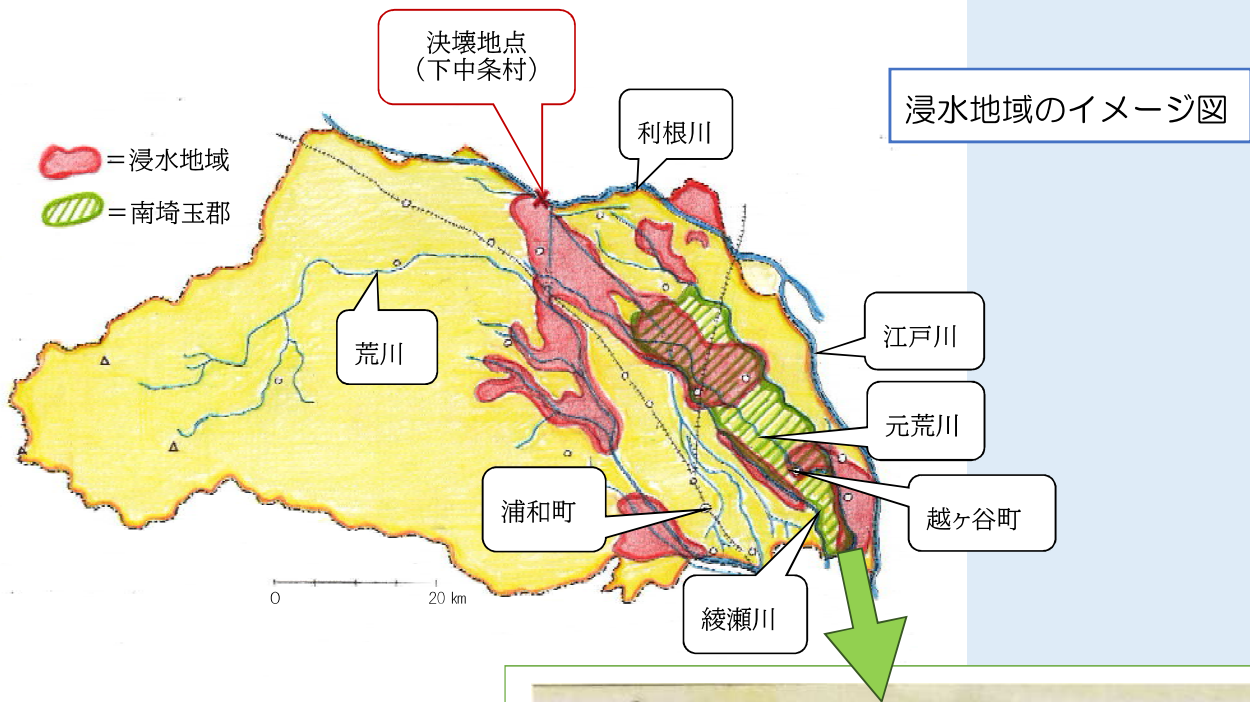


4人が楽しそうに宴会をしています。彼らはそれぞれある言葉を表しています。右から「すめばう（すいぼう）＝水防」、「古ん志ん（こんしん）＝懇親」、「けんぴ＝建碑」、「をけはち＝桶八（?）」です。そしてこの4人の上には、その言葉に因んだ五七調の文があります。

これは大水害の爪痕を復興させて、それを記した石碑を建てたことを祝っていることを表現したものです。当時の人々は後世に何を伝えようとしたのでしょうか・・・

その水害とは、明治23年（1890年）8月に埼玉県東部を襲った災害でした。

2 浸水図



『埼玉県水災概況』

(宮内庁宮内公文書館蔵)

明治23年8月の水害による被害状況について、県内各郡から当時の宮内省に報告がなされたものがこの史料です。上のイメージ図はそれをもとに作成したものです。右の絵図は越ヶ谷地域を含んだ南埼玉郡からの報告に添付されたもので、色の濃い部分が浸水地域です。



3 市域の被害状況

洪水の経過

8月22日：激しい降雨が翌日にかけて続いた。

8月23日：北埼玉郡須加村下中条（現・行田市）の利根川堤防が59間^{けん}（約106m）にわたって決壊。

23日以降：現・越谷市大林地区の元荒川堤防が26間（約47m）決壊。

同、大沢町の元荒川堤防決壊。

葛西用水が溢水^{いっすい}（水が堤防を越えて溢れること）。

二郷半領^{にこうはん}の木売^{きうり}（現・吉川市）の古利根川（中川）堤防決壊。

27日以降：越巻地区で綾瀬川溢水。綾瀬川に水を流下させた。☞パネル④、及び「配布資料」参照

現市域の旧町村別浸水被害一覧（「埼玉県水災概況 明治23年」『宮内庁宮内公文書』より作成）

当時の町村名	浸水日数(日)	浸水戸数(戸)	町村内戸数(戸)	被救助人員(人)
越ヶ谷町	20	17	618	46
大沢町	20	320	423	1384
川柳村	15	14	144	93
大相模村	15	10	275	53
蒲生村	15	21	404	13
出羽村	15	21	—	78
増林村	20	470	614	1572
新方村	20	175	324	781
桜井村	20	156	383	487
大袋村	20	137	306	324
荻島村	15	24	176	15
現市域全体	15～20	1365	3667 (出羽村を除く)	4846
南埼玉郡全体	15～25	4693	—	17588
埼玉県全体	—	26195	—	—

※＝表中の「町村内戸数」は『越谷市史 二』による。出羽村は不明。

浸水日数が2週間～3週間以上という長さでした。まだ電気が通っていなかったの
で、現代のような排水ポンプ
がなかった時代です。

現市域になった町村全体で
の浸水戸数は1365戸にも
なりました。救助された人は
4846人になりました。

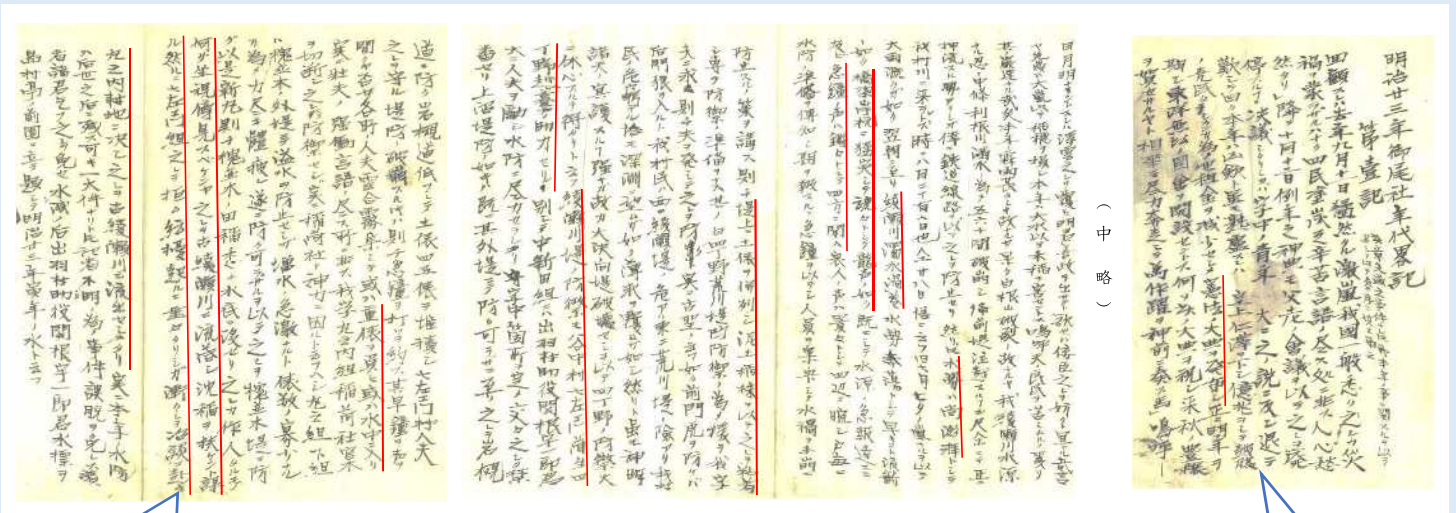
【参考文献】

- ・「埼玉県水災概況 明治23年」『宮内庁宮内公文書』
- ・『越谷市史 二』
- ・『葛西用水史』
- ・『越巻中新田の産社祭礼帳』

4 人々の奮闘

この地域にまだ鉄道や電気が通ってなかった時期、大きな水害に対して先人たちはどのように捉え、立ち向かったのでしょうか。

地域の史料からその様子をご紹介します。



(中略)

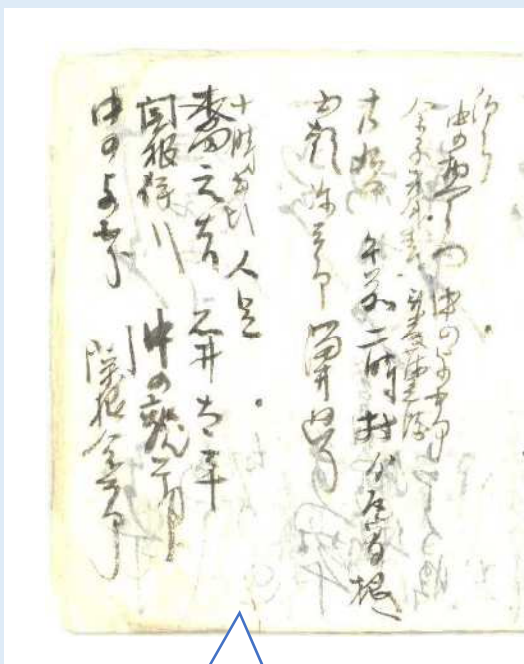
「溢れた水で実りかけている稲穂が水没していくのを座視できず、古綾瀬川に水を落とそうとしたが下流の集落では認めなかったの、騒動になりそうだったが、話し合って自分たちの集落から落とすことにした」と、あります。

おびしやさいれいちょう 越谷市指定文化財「越巻中新田の産社祭礼帳」(個人蔵)

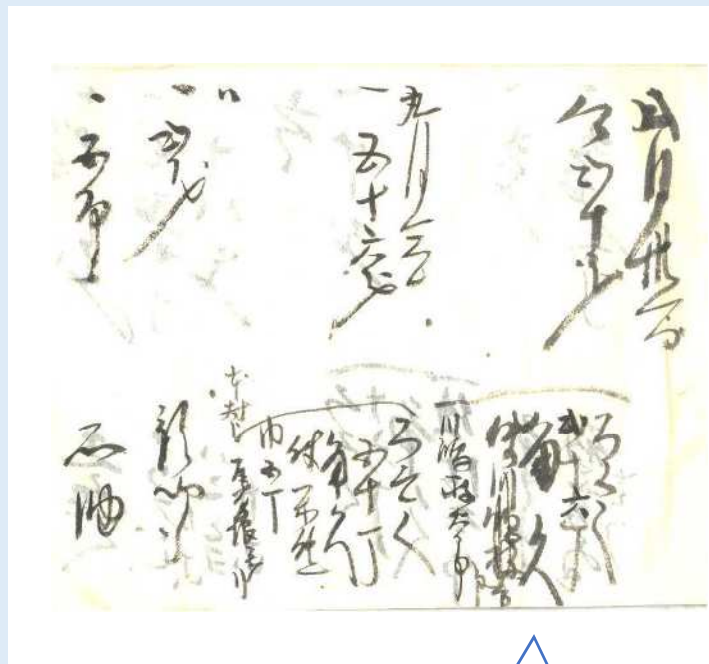
綾瀬川左岸、旧越巻村の「産社祭礼帳」は370年もの間、書き綴られている年代記です。今なお、毎年書き足されています。今回は地域の方のご了解により、この一部をご紹介します。

明治23年の水害についてはその凄まじさや人々の水防活動、そして近隣の集落との協力と利害対立なども記されている貴重な記録です。(特に赤色傍線部をご覧ください。)(配布資料ご参照下さい)

この水害の前年には大きな台風で塗炭の苦しみだったことや、大日本帝国憲法が公布されたことが記されています。



午前2時に瓦曽根溜井を巡回したことや、10時頃に動員された人々の名前が記されています。



「日記」(個人蔵)
旧蒲生村の有力者が書き残したものです。水防のための出動やその人々、揃えた用具、車(人力車?)で駆け付けたことなどが記録されています。

水害発生から1週間以上経っても、ろうそくなどの物資を購入して水防、復旧活動に当たっていた様子が記録されています。

5 建 碑



瓦曾根溜井防水記念碑

水害復旧後の明治26年（1893年）に地元の人々が建てた石碑です。題字は「日本近代郵便の父」と呼ばれた前島密によるものです。最初のパネル①「水防建碑宴会図」はこの石碑に関するものです。

【現代文要約】

明治23年(1890)8月上旬から雨多く、22日に大風雨となり、23日に下中条で利根川の堤防が決壊した。(現越谷市域は)元荒川や葛西用水の大洪水となった。瓦曾根溜井では水位が上昇し、溜井の堤防が決壊すると下流域の東京が水没してしまうことから、東京からも応援の人々が駆け付け、警鐘を鳴らし篝火を焚き昼夜土俵積みを行い、防御に努めた。古利根川左岸の木売で決壊して、こちら側は難を免れた。



瓦曾根溜井（紫色の点線内）

かつてこの領域は“溜井”と呼ばれる所でした。しらこぼと橋付近に堰が設けられて、溜井の水量を調節していました。



自然災害伝承碑

自然災害の歴史を学び、その教訓を未来に伝えるために、国土地理院が2019年（令和元年）にこの地図記号を制定しました。越谷市西方にあるこの石碑も地形図の中に記されています。

おわりに

現代よりも国や都道府県の治水が十分ではなかった明治期、さらには電気や鉄道も通っていない中では、地域の人々は自ら人力で水防にあたるしか有効な方法がありませんでした。だからこそ村同士、集落同士の共同が必要だったのですが、水防の場合には利害が対立することも珍しくなかったことが史料にも表れていました。時にはそのことによる犠牲もありました。

これらのことを乗り越えて懸命に地域を守ろうとした先人たちが建てた石碑やその他の史料から学ぶものは、とても深くて大きいものです。ご高覧いただき、誠に有難うございました。

令和 6 年度企画展
「苦難を乗り越えて－明治 23 年の水害－」
配付資料

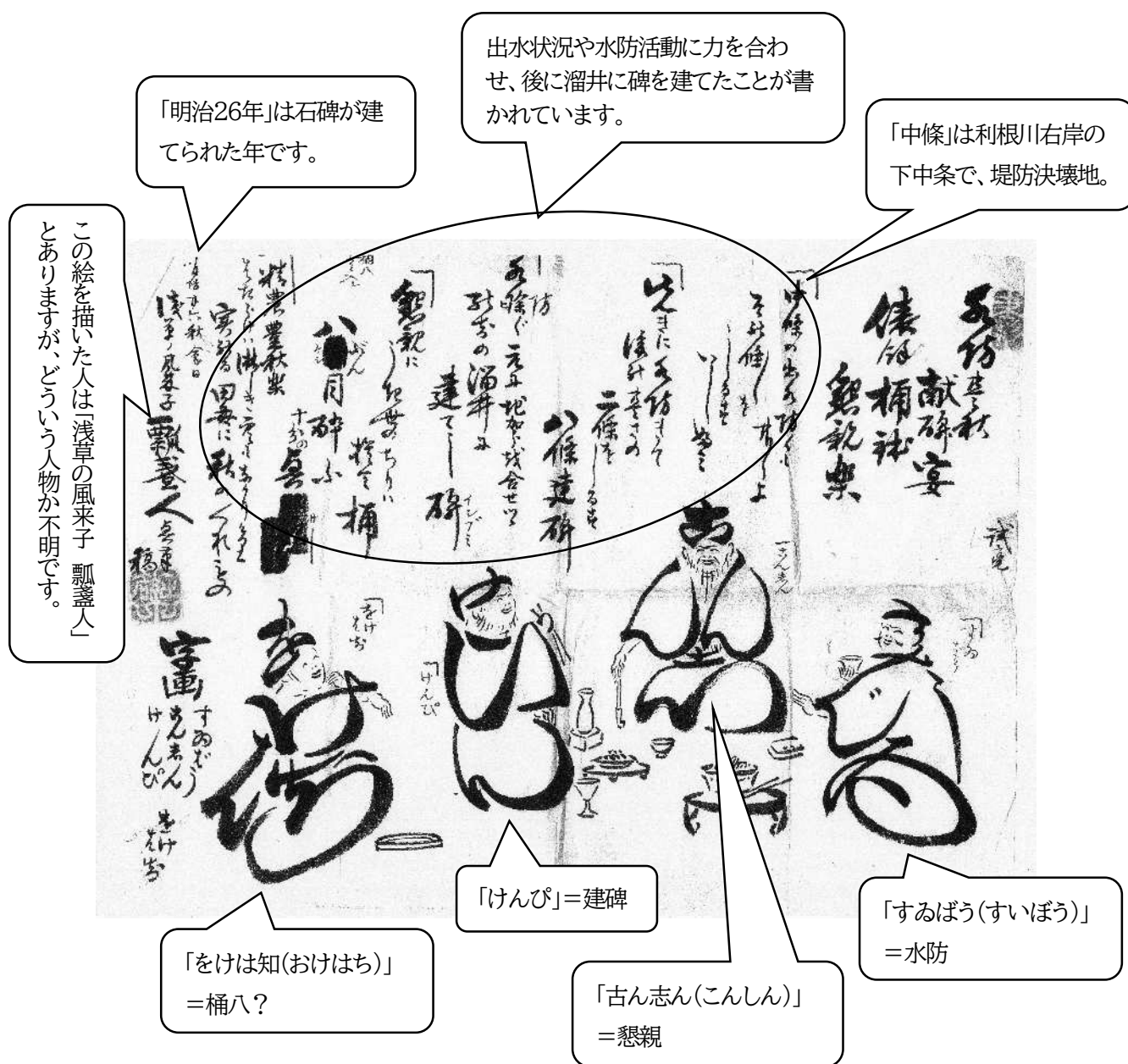
(レイクタウン防災フェス関連事業)

苦難を乗り越えて

— 明治23年の水害 —

水防建碑宴会図 (個人蔵)

明治23年(1890年)夏の大水害と人々の水防活動を刻んだ石碑を建てたことを祝っている様子を表している絵です。



この史料は旧蒲生村の有力者の家に残されていたものです。この史料が描かれたことや理由、依頼者などの経緯は不明です。明治23年の水害当時、この家の当主は度々瓦曽根溜井に出向いて巡回し、また仲間を集めて水防活動したことが『日記』に記されています。(☞パネル④)

「明治廿三年 御尾社年代略記」の水害記述

(越谷市指定文化財『越巻中新田の産社祭礼帳』(明治23年8月23日以降)より現代文要約) 〔お〕パネル④

- ◆洪水は我が村にも^{ほうはい}澎湃（増水して逆巻く様子）として押し寄せて来た。朝、綾瀬川の濁流渦巻き、橋の^{たもと}袂に猛突して、その音は龍声のようだった。緊急事態を知らせる急^{きゅうしやう}鐘（半鐘の連打）が響いた。
- ◆駆け付けた村人達は堤防に土俵を並べ、泥と稻株を俵と俵の間に練り込んだ。
- ◆四丁野（現・宮本町）から我が村に救援を求めて来たので、人員を派遣した。四丁野側は^{まも}護られたが、対岸の大沢町の堤は決壊した。
- ◆綾瀬川堤の^{ぼうぎょ}防御も谷中、七左衛門、蒲生、四丁野、越ヶ谷、登戸が共同した。
- ◆中新田組では出羽村助役の関根宇一郎氏が人々を励まし、水防に尽力してくれた。地域の見張り所を設定して交代で勤めた。
- ◆岩槻に通じる道の堤防は七左衛門の人々が土俵を積んで守った。
- ◆急鐘を聞くやいなや人々は直ぐに集まり、俵を背負って水中に入って土手を補修するなど、言語に尽くせない活動だった。
- ◆我等、丸の内組は稻荷社の木を切って防御に使った。実に稻荷社の神力によるところである。
- ◆我等より下流でも^{いっすい}溢水（川の水が堤を越えて溢れること）を防いでいたが、急激な増水や土俵不足のために遂に防ぐことができず、地域の稲は全て水底に没してしまった。これを農民としてどうして座視していられようか。溢水を古綾瀬川に流して稲を救おうとしたが、下流地域では賛成しなかった。
（住民同士の）争いになりそうだったが、話し合って我々丸の内の耕地から古綾瀬川に流出することにした。このことは後世に書き残すべきことである。

水防活動や村々の共同、また利害の対立など、当時の状況が目には浮かぶような記述です。こういうことを乗り越えて地域を守ろうとした姿が活写されています。

旧家の軒先には水害に備えて吊るされた舟が、今も残っているところもあります。大間野町旧中村家住宅の土間の上には、水害に備えた米や味噌を備蓄した屋根裏があります。